

近代期における上層農家の屋敷変容

- 福岡県うきは市の楠森河北家と野上家を対象に -

山田 達郎

1. はじめに

本研究で対象とする楠森河北家と野上家は、福岡県うきは市浮羽町に位置する旧家である。楠森河北家が居を構える山北地区は、筑後川中流域の平野部に位置し、北方には水田地帯、東方には茶等の耕作地となっている台地が広がる。また、野上家が居を構える新川地区は山間部に位置し、地区の大部分は山林である。

2つの家は農村における上層農家として、近世期より村の中核となり機能し、明治に入るとさらなる事業展開を進め、地域において主導的な役割を担った。

本研究では、近代期における上層農家の屋敷構成、またその使われ方の変化に着目する。そして、2つの家を比較することで、近代期、上層農家の屋敷に起こる空間変容を持った意味を考察する。

2. 楠森河北家

2.1. 地域内における家の営み

楠森河北家は元和元年（1616）に山北に帰農したと伝えられる旧家である。近世期の村落内には、村内の各名の中核として村落における運営組織的役割を担った家々が存在した。中でも、楠森河北家は田代組惣代

を務めるなど、村内において庄屋に次ぐ家であった。¹⁾

幕末期には、村内において茶業や酒造業、林業など多角的な事業開発とともに農地の集積を進めた。そして、村落により大きな影響力を持つようになる。明治期に入ると、庄屋であった家が明治30年代後半廃絶する。これを機に、楠森河北家は村内最大の地主となる。大正期には、新規事業を開拓、加えて近世より続く茶業などの工場の近代化を図り事業拡大を進めた。

2.2. 屋敷構成

主屋は明治14年（1881）、9棟ある付属屋の多くは江戸後期から明治期にかけ建てられた（図1）。主屋は片入母屋椽瓦葺きの屋根で、白漆喰で塗り込められた木造である。東側を正面とし、巨大な破風が外観意匠を形作る妻入りの入口から、ドマへと入る。入口左手には2階部分が吹き抜け、梁が露出したゲンカンが現れる。隣接するブツマ、ザシキは続き間を構成し、さらにその奥は、離れのシンザシキへとつながる。主屋西側には、ドマの隣にナカノマ、その奥のナンド、さらにはコザシキ、カンジョンマがある。また、屋敷奥には、3部屋からなる離れ座敷がある。

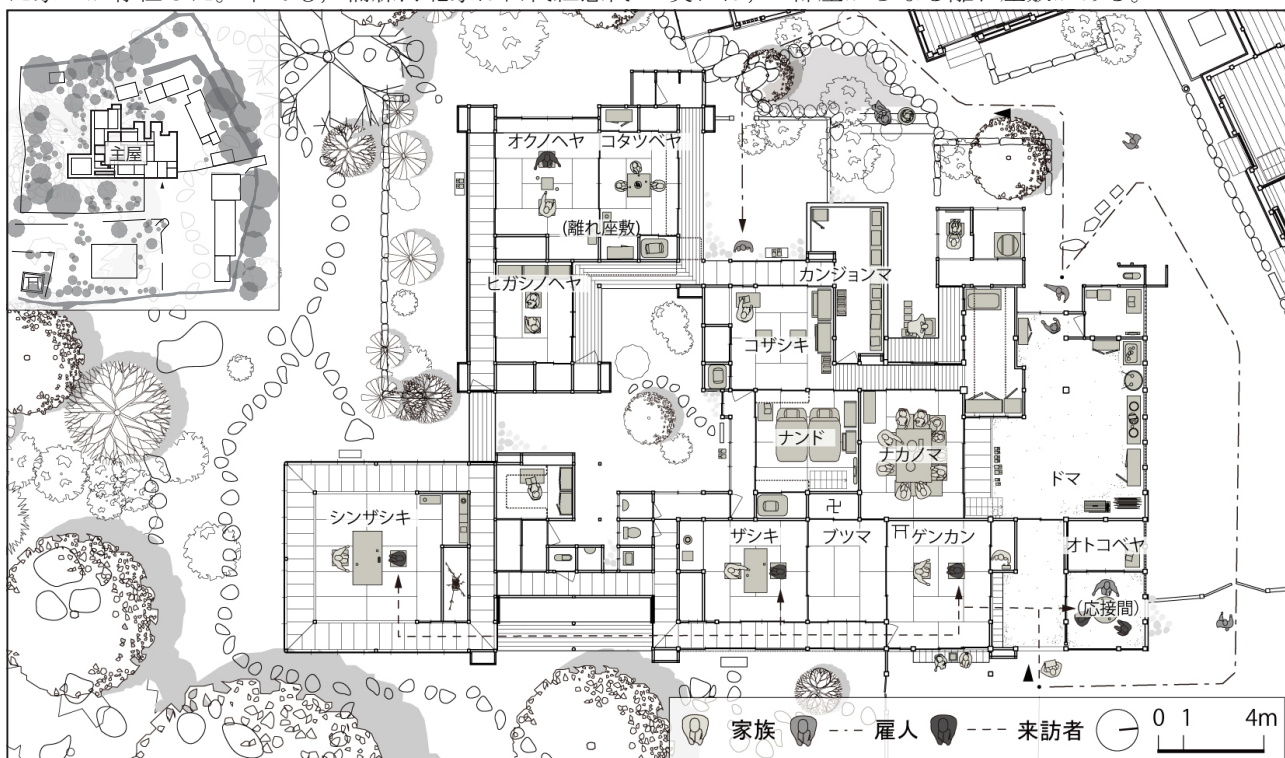


図1 昭和期における屋敷利用と人の属性（楠森河北家）

2.3. 近代期における屋敷利用

2.3.1. 日常生活

楠森河北家には、家族と共に住みこみの雇人が生活しており、屋敷内に居住した人数は、10人ほどだった。昭和期、屋敷に居住した家族そして雇人の生活をみていく(図1)。当主夫妻は、主屋内側に位置するナンドで寝ており、朝起きるとそのままナンドで着替えを済ませる。隠居世代、子供たちはそれぞれ離れ座敷のヒガシノヘヤ、コタツベヤで寝ており、朝起きると家族皆ゲンカンの神棚、ブツマの仏壇に手を合わせるのが日課であった。男の住み込みの雇人Agは、付属屋の1棟に居室が設けられ、彼の妻と寝食を共にしていた。かつては、オトコベヤが居室としてあてられたが、戦後期は働き手の休憩室となっている。また、女の雇人Ksは昭和期、家内全般の雑事を任せられるような人物であった。彼女はナカノマ直上階にある2階居室に寝泊まりする。朝食は土間に隣接するナカノマでとられ、Ksも給仕のため同席したが、自らの食事は早めに土間でとっていた。家族が朝食を済ませると、通いの雇人がやってきて、楠森河北家の一日が始まる。

また、オクノヘヤには主に当主の友人が通されるような部屋で、西側の離れ座敷は、他の2室とともに家族の生活色の濃い場所であったとみられる。

2.3.2. 事業経営

近代期、多角的な事業を展開した楠森河北家は各事業の拠点を屋敷外に所有していた。一方屋敷では、当主また経理担当者の役目として各事業の管理、また経理があった。当主はコザシキで書き物などをよく行っており、仕事部屋としていたとみられる。通いの経理担当者Skは、作業部屋としてあてられたドマ直上階の2階居室またはカンジョンマで作業していた。屋敷には、各事業の担当者が当主に指示を得るためコザシキへ、または小作人が小作料の納付にカンジョンマへ頻繁に訪れる。ザシキ、カンジョンマの一角は、経営する事業に関する仕事場として使っており、事業にまつわる来訪者の対応もしていた。また、事業の拠点を屋敷外に持つ楠森河北家の、屋敷における役割は、地域内外に展開した各事業の統括であったとみられる。

2.3.3. 接客

近代期、家には地域内外から多様な来訪者が訪れた。彼らはゲンカン、ザシキ、シンザシキのいずれかに通され、人により通される部屋が違っていた。例えば、他村落の有力家が屋敷に訪れた際はゲンカン、浮羽町町長や村の神主はザシキに通された。また、河北家の先祖を祀る屋敷内の山北神社の例祭には、戦前ま

で河北家に加え、地域の人々も参詣した。その直会は、続き間で行われていたとみられる。一方で、地域外から政府官僚などが訪れた際はシンザシキに通された。

加えて、近代期には事業にまつわる茶や木材などの商談相手が訪れたが、彼らは人により4部屋に分けられていた。特にとりあう必要のない訪問者は、入口脇に設けられた応接間で雇人Agが対応した。規模の小さな商談もしくは些細な用の客はゲンカンに通されたが、一般に商談相手はザシキに通されることが多かったようである。頻度は少なかったが、規模が大きく重要な商談の際には、客をシンザシキへ通していた。

神主や町長など浮羽地域内の客、通常規模の商談はゲンカン、ザシキといった主屋旧来の空間を使った。一方、新設のシンザシキは、地域外からの重要な客へ対応した空間であったことがわかる。

2.4. 屋敷空間の変容

明治期に入り、屋敷構えに大きな変化が現れる。明治14年、元は茅葺きであったが瓦葺き、また漆喰の外壁を有する建物に新築される。片入母屋の屋根は底辺約5間、高さ約1.5間もの大きさの破風を掲げ、妻入りの住居は強い正面性を表すようになる(図2)。

さらに、明治中期の離れの出現により、屋敷はその様相を変容させる。シンザシキは、主屋正面側、かつ続き間の最奥であるザシキのさらに奥に新設される。また、南北方向の配置は部屋の3面からの視界を、周囲の建物が邪魔しないよう決められていることがわかる。内部から見ると、12畳半の空間に対し、最大2間半の柱間を約110mm角の細い柱が支え、庭と一体化した空間をつくる。また、重量のある瓦葺きの入母屋屋根とは対照的な、屋根を支えている細い軸部や、欄間など内装の繊細な造作にみえる軽快さが優れた意匠性を表す(写真1)。このようにシンザシキは、外観意匠、空間性、内装を一体と捉え、単体の建物として完成させた一部屋といえる。そのため、主屋旧来の空



写真1 シンザシキ (左: 外観, 右: 内観)

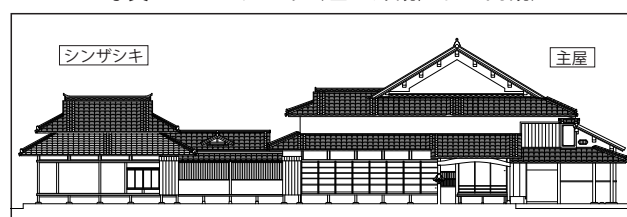


図2 主屋東側正面立面図 (楠森河北家)

間から独立して配置している。一方で、瓦屋根の勾配を主屋と統一させるなど、旧来の主屋と共にまとまりのある建物として統一された意匠も持ち合わせる。

西側の離れは、渡り廊下もなく主屋に付属する形で位置する。建物の構成上、角屋による主屋拡大ができなかったために、別棟でつくられたとみられる。配置は主屋裏側で、シンザシキの空間性を優先し、その北側壁面に合わせる形で、L字に折れ曲がる構成をとる。

3. 野上家

3.1. 地域内における家の営み

野上家は中世北部九州を支配した大友氏の武将の末裔といわれ、近世期には有力な林業経営者であった。

幕末期は、林産物に付加価値を付ける林産工業に努め産をなした野上家は、田畑や山林を集積していった。また当時、官山の管理役の役割も担っていた。

昭和3年(1928)には田畑約12.3町に加え、少なくとも約370haの山林を保有していた。所有する山林は村内、また浮羽郡内に留まらず、県外にまで及んだ。²⁾

3.2. 屋敷構成

野上家は川沿いに、非常に高い石垣によって造成された土地に立地する。対岸からは、石垣の上に、地区最大規模の主屋を有する屋敷構えを確認できる。

敷地中央に主屋、周囲に4棟の付属屋を配す(図3)。主屋は、安政3年(1856)築の茅葺き屋根を持つ木造平入りである。平面はドマと、ゴゼン、ブツマ、ダイドコロ、ナンドを基本とした四間取りとブツマの隣に角屋のザシキをもった、鍵屋の形をとる。2棟ある離れ座敷は奥が明治期、手前が昭和期に建てられたもので、後方の離れ周囲には、整備された庭が広がる。

3.3. 近代期における屋敷利用

3.3.1. 日常生活

野上家には、10～15人ほどが居住しており、その

うち、住み込みの雇人が4人ほど共に居住していた。昭和期における、屋敷に居住した家族そして雇人の生活をみていく(図3)。子世代の若夫婦はザシキ、親世代の夫婦はナンド、隠居世代は屋敷奥にある離れ座敷の南西側の一室で寝起きする。世代が上がるごとに、ザシキ、ナンド、離れ座敷の順に寝間としており、隠居世代が亡くなると、親世代が離れ座敷、子世代がナンドに移った。残る子供たちは、ブツマやナンド上の2階居室などを転々として寝起きする。雇人は男女おり、男は主屋入口脇の部屋を寝間とされ、戦後期には、付属屋のニワンニカイ2階を使うようになった。2人いた女の雇人はナカンナンドで寝起きする。朝食の時間になると、山の働き手が屋敷へやってきて、家族は土間に隣接するダイドコロ、働き手も共にウチニワで食事していた。そして朝食を済ませると、各々の仕事場へと出ていく。また、山に入った後も、働き手は昼夕と屋敷に戻り、食事を共にしていた。

ザシキなど旧来は接客に使われた部屋も寝間とされたことが特徴で、主屋において、世代や雇人が混在しつつ、全体的に生活色の濃い空間になっていた。

3.3.2. 事業経営

山林の雇人などの給与は盆と正月と決められており、帳簿整理の時期には経理担当者が1か月ほど泊まりで作業していた。その際、使われていたのが勘定の間というゴゼン脇の一坪ほどの部屋である。勘定の間には、窓口も設けられ、各山の管理人などが状況報告のために訪れた。またゴゼンには、当主が常におり働き手たちの動きを見ながら、指示を出していた。浮羽郡外にも山地を所有した野上家は、各地に拠点置き、山ごとに管理人がいた。それらの管理人は、浮羽郡内の山の管理人が番頭となり束ねていた。彼は屋敷傍の蔵の2階に寝泊まりした。

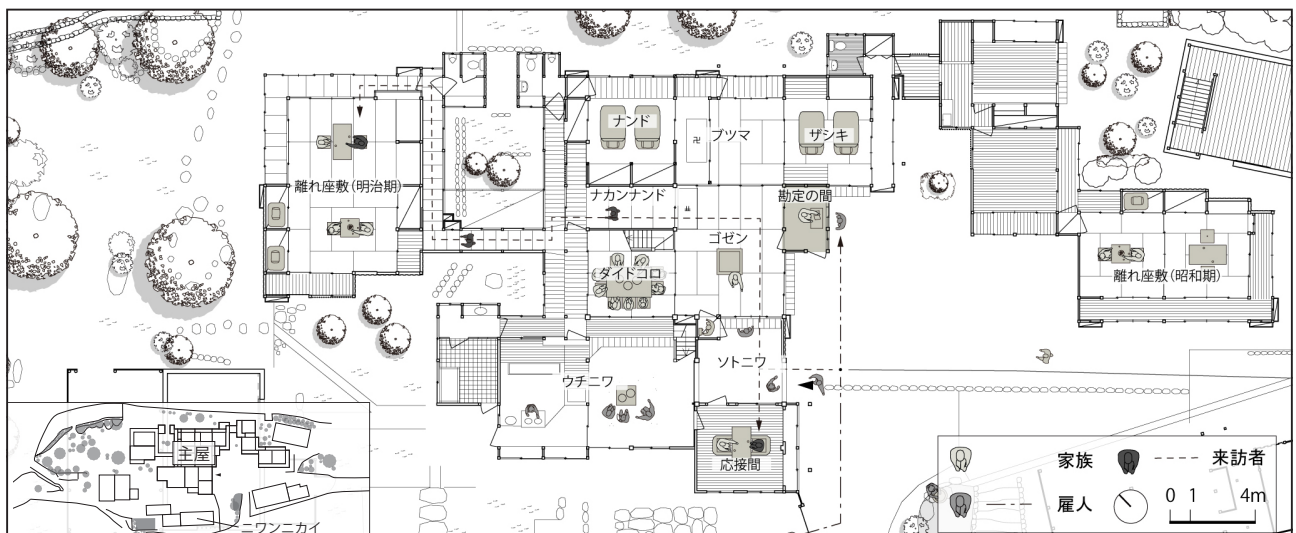


図3 昭和期における屋敷利用と人の属性(野上家)

3.3.3. 接客

近代期、野上家には、木材の商談相手、銀行や証券会社などの客が訪れていた。入口から入った客は、渡り廊下を通り離れ座敷の北東側の一室へ通される。また、結婚式や毎年のように開かれたという法事も離れを使う。その際は二間を一体的に使い執り行なった。

来訪した客が通された部屋には、二度の転換期がある。明治初期まで、来訪客はザシキに通されていたが、明治8年(1875)、主屋奥側に離れ座敷が増築されると、客が通された部屋が変化する。それまでのザシキでなく、離れの北東側一室に通されるようになった。次に、昭和30年(1955)頃、土間内の男部屋を改築し、洋風の内装が施された応接間が設けられる。すると、応接間と離れ座敷が使い分けられるようになる。大半の客は、応接間に通され、国会議員や他村落の有力家など重要な客が訪れた際は、離れ座敷に通された。

3.4. 屋敷空間の変容

主屋は、安政3年(1856)に新築されたもので、近代期に入ると、明治8年(1875)に屋敷奥側に離れ座敷、昭和後期、手前側に離れ座敷が新設される。明治期の離れ座敷の北東側一室は、広さ10畳、2間の柱間で観賞庭と川の方を向き、また小壁の曲線を描く欄間、付書院を持ち、高い意匠性が読み取れる。

屋敷は昭和初期まで、ザシキ南東側を横切るアプローチ路を有し、また山間の限られた敷地には屋敷規模に制限があった。その状況を加味し、明治期の離れは、ザシキ等旧来の続き間が持つ南東への方向性とは逆の北西側に配置される(図4)。また規模は最小限に、二間構成の1棟で新設された。新設後は、旧来の接客

空間であるザシキの機能を完全に吸収する形で離れ座敷が使われる。ザシキを寝間にすると共に、ザシキに比べ意匠の整備された接客の場へと更新された。機能を吸収する上で、旧来の続き間の二間一体的な利用の場面も担うことが求められる。そのためにも、離れ座敷は二間構成をとる必要があったと考えられる。

4. 近代期の上層農家の屋敷に求められた変化

近代期、地域の事業は規模や業種において広がりを見せる。2つの家はその経営者として、屋敷には事業運営を行ない、地域を主導する役割がみられた。さらに事業の広がりなどとともに、近代期に展開し構築される地域外部との関係が、屋敷における接客場面に確認できる。そしてその動きに呼応するように、屋敷は様相を変容させる(図4)。変化の内容をみると、地形条件等の違いにより配置や構成に違いがあるものの、近代期に2つの家が離れ座敷により屋敷変容を行なおうとしたことに共通点がある。

離れ座敷に求められたものは、意匠性が高く、庭など外部との親和性のより高い、旧来までの主屋には見られない空間であった。また、とりわけ楠森河北家では、入口正面部分をみると近世期までのものにはない正面性の高い意匠が施されている。これらの変容は、各家の対外的な側面に関わるものであったといえ、当時の上層農家が持ち始めた、地域における、地域外との接点となる役割に関係するものと考えられる。

【参考文献】

- 1) 『近世後期筑後農村における豪農の生活慣行と家訓—河北家「家伝相統記」をめぐって—』(秀村選三/1977)
- 2) 『開書 山林地主家(福岡県)へ嫁いできた女性達—「ねんねんばばしゃま」の明治・大正・昭和—』(山口信枝/2009)

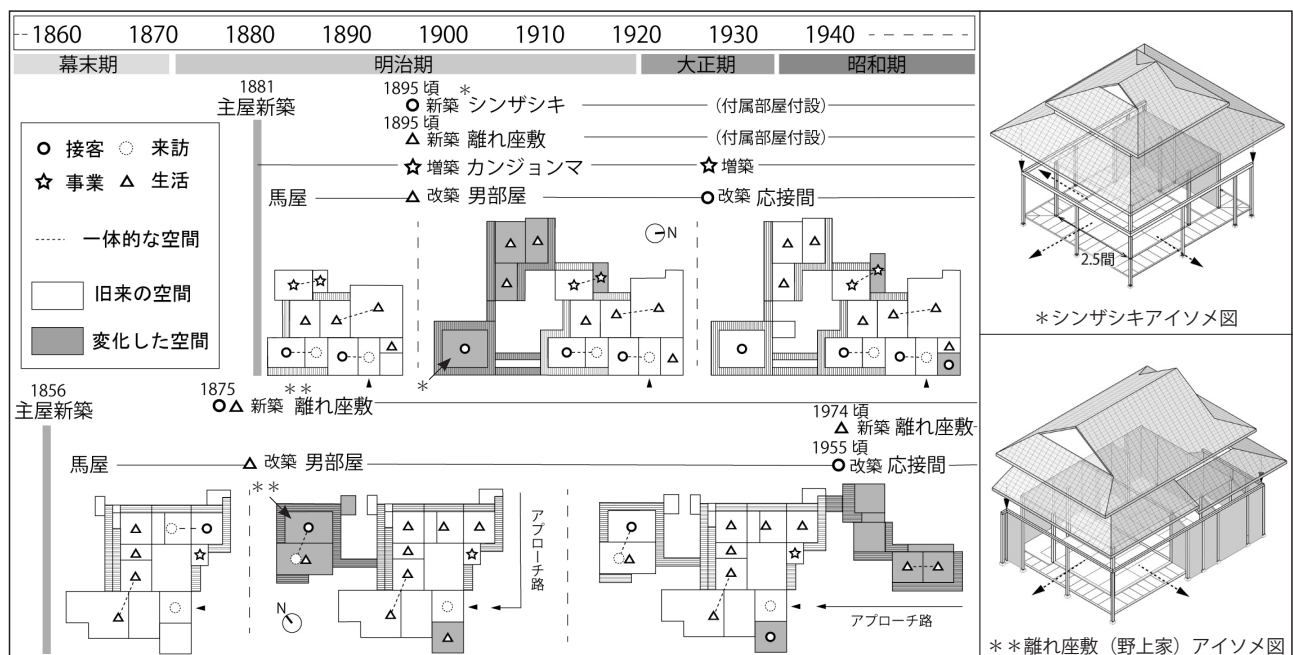


図4 主屋における構成と利用の変容(上:楠森河北家,下:野上家)